

惠日山金剛禪寺者。始波多野中務忠經。爲鎌倉右府將軍實朝公菩提。建長二庚戌年。建立相州波多野莊田原村。後江戸下野入道道心。移寺於武州江戸莊小日向郷金杉村。亦其後文明年中太田左衛門入道靜勝軒春苑道灌。重興焉。昔日者臨濟宗也。其時之開山普應國師。二代巨舟和尚。中興叔悅禪師。永正六己巳年改曹洞宗者也。維時永正十癸酉年七月十日。金剛現住比丘實山叟記之。

金剛寺殿鎌倉右府將軍實朝公大禪定門

承久元己卯年正月二十七日

地藏堂 同山頂にあり。本尊は天竺佛にして、賴朝卿鎌倉圓覺寺の後に安置ありしを、實朝公の時波多野に一字を建立ありて、彼地に移し奉りしを、後金剛寺と共に此地に轉じたりといへり。

當寺は波多野中務忠經に、東鑑に、中務丞忠綱と云ふ名あり。諸家系圖に依て考ふる鎌倉將軍實朝公の菩提を弔

はんが爲、建長二年庚戌、相州波多野莊田原邑に造立せし所の精舎にして、其後江戸下野入

道心佛、今の地に遷せしといふ。又文明年間、太田道灌當寺を重修し、叔悅禪師をして住持

たらしむ。梅花無蓋藏傳長老の註に、叔悅故に、實朝公、及び道灌の靈牌、ならびに肖像等を置く。

總門の額に、慧日山と書せしは、黃檗即非の筆なり。白石先生云く、梅花無蓋藏文明十七年乙巳東遊の時、註に、芳林院に於いて李太白の墨蹟を見る。同じく其下に



小日向上水端
道祖神祠

芳林院今金剛寺と號すとあり

按ずるに北條家の分限帳に、島津孫四郎、北品川、小石川、及び金曾木(カナツギ)内、法林院、金剛寺分等の地を領する由を記して法林院に作る。又小田原實記に、大永四年正月十三日、北條氏綱、上杉修理太夫朝興とたぐひ勝ちて、江戸の城にうつる條下に、其頃當所芳林院の孤舟和尚來りて萬里居士の江亭記を捧ぐると、また孤舟和尚其後は金剛院に住すと記せり。これに因て考ふれば、金剛寺と法林院は別なる事しるべし。

當寺往古は境内廣く、寺院魏々として、首座、主閣、侍者、沙彌、喝食、維那、納所、行者、火番などありて、祈禱、上堂、參禪の式、勤め怠らずして、堂塔も壯麗たりしとなり。

道祖神祠 同く上水堀の端、金剛寺より二町ばかり西にあり。明徳年間の勸請なりといへり。別當龍門寺に、當社勸請の碑と稱するものあり。

氷川明神祠 同西の方、二町餘りを隔て、是も上水堀の端、慈照山日輪寺といへる禪林にあり。祭神は當國一宮に同じ。勸請の始久しうして知るべからずといへり。中古太田道灌

の再興にして、小日向の鎮守なり。祭禮は正、五、九月の十七日なり。當社に元龜の年號ある。庚申待供養の古碑あり。大日堂 同西の方、大日坂にあり。天台宗にして、覺王山妙足院と號す。相傳ふ、本尊大日

如來は、慈覺大師、唐より携へ來る所の靈像なり。往古は叡山の中に安置ありしを、元龜年



間、織田信長、總門を襲はるゝ頃、堂宇悉く兵火に罹りて灰燼となる。されど此本尊は火焔を遁れ出で、近江國兵主明神の社頭深林の中に移り給ひ、其後夜なく瑞光を放ち給ふ。よつて藤原氏某、感得して其家に移しまるらせ、旦暮供養する事怠りなし。然るに此人嗣子なきを憂とし、此尊に祈求して、竟に一女子を設く。長ずるに及んで、紀伊亞相頼宣卿に仕へ奉り、後落飾して法善尼と號す、此尼靈夢を感じるの後、當寺を闢き、こゝに安置し奉りしといへり。

大洗堰 目白の涯下にあり。承應年間、嚴命により、當國多摩郡牟禮邑井頭の池水をして、江戸大城の下に通ぜしむ。其頃此地に堰を築せられ、其上水の餘水を分らるゝ。天明六年丙午の洪水に堰崩れたり。こゝに於て再び堅固に築せられ、古より壹尺ばかり其高を減ず。故に水嵩む時は、其上を越えて流れ落つる故に、損する患なしといへり。

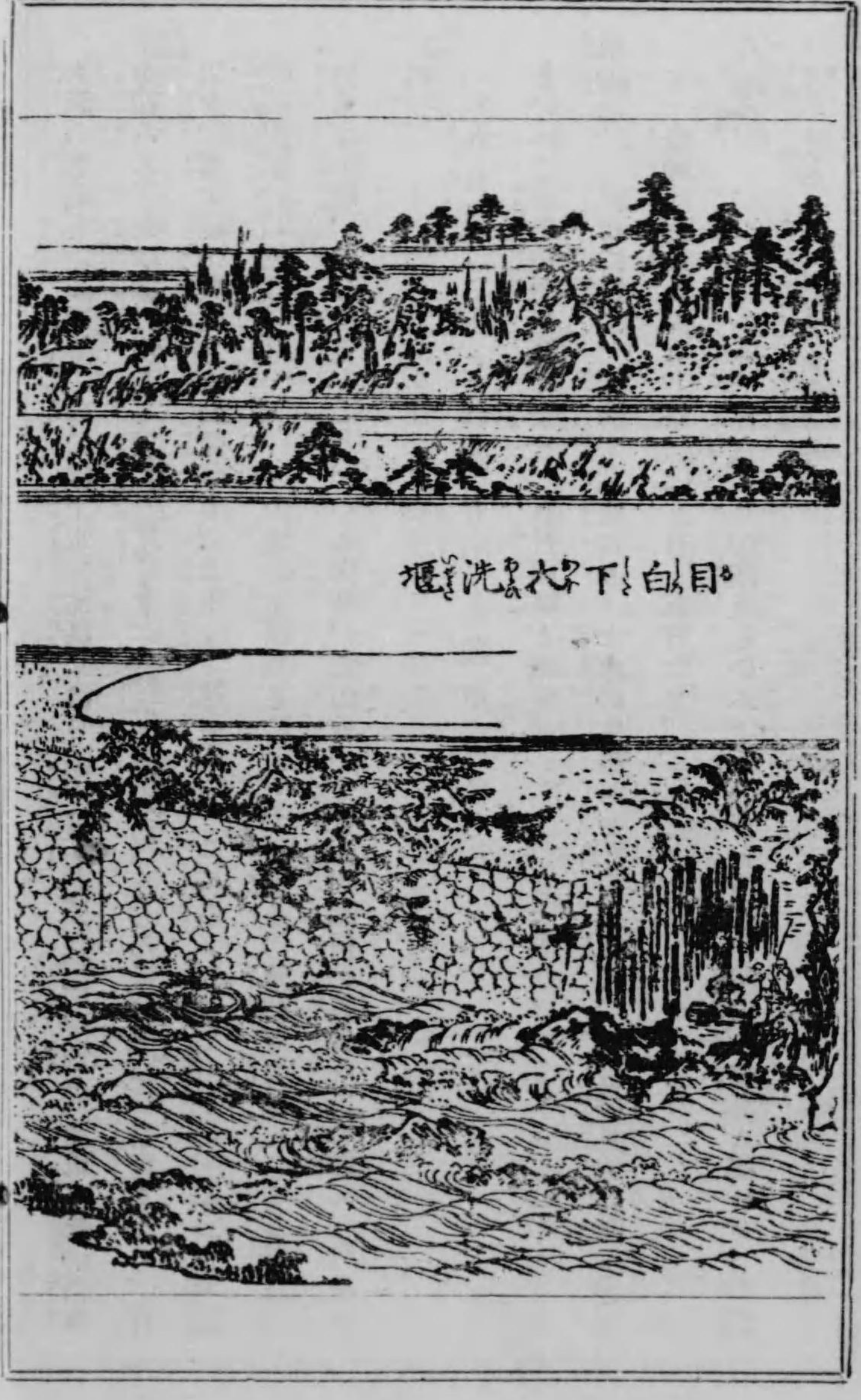
龍隱庵 同所上水堀の端にあり。昔は眞言宗にして、安樂寺と號く。故ありて元祿十年丁丑、黃檗宗に改め、洞雲寺の持となり、洞雲寺は音羽町八丁、平石和尚住持す。本尊は正觀世音、慈覺

大師の彫造といふ。庵の前には上水の流横たはり、南に早稻田の耕田を望み、西に芙蓉の白峯を顧みる。東は堰口にして、水音冷々として禪心を澄しめ、うしろには目白の臺聳えたり。月の夕、雪の朝の風光もまた備れり。昔上水開發の頃、芭蕉翁芭蕉翁、通稱松尾其七郎といひ、薩摩家の士たり。此上水堀割の時、薩摩家へ普請の事を命ぜられしに其七郎此事を司りし故、其頃此地に日々遊ばれしといへり。この地に遊ばれしにより、後世その舊跡を失はんことを歎き、白兔園宗瑞、及び馬光などいへる俳師、この地の光景江州瀨田の義仲寺に髣髴たるをもて、

五月雨に隠くれぬものよ瀨田の橋
といへる翁の短冊を塚に築き、五月雨塚と號す。

水神社 同所に竝ぶ。龍隱庵別當たり。上水の守護神を祀らん爲に、北辰妙見大菩薩を安置す。祭神は罔象女なり。祭禮は五月十五日なり。

八幡宮 同社地にあり。往古よりの鎮座といふ。下の宮と稱し、椿山八幡とも稱せり。昔は椿し故に、椿山と號くと云ふ。祭禮は毎歲八月十五日、上の宮と隔年に執行す。洞雲寺奉祀す。



目白下大洗堰

芭蕉庵
五月雨塚
駒留橋
八幡宮
水神宮



駒留橋 龍隠庵の前、上水の流に架す。此水流は神田の上水なれど、玉川の分水の落合にして、山吹の里に傍ひて流るゝ故に、

駒とめて猶水かはん山吹の花の露そふ井出の玉川

といへる古詠の意をもて號けけるとぞ。又里諺に、右大將頼朝卿、此地に陣せられし頃、雪の朝、此川傳ひを、駒に打乗りて眺望ありしが、興盡きて、此橋の邊より歸り給ひしより、駒留橋と號くるといへども、詳ならず。同所幸神の社記に駒留橋の事あり、此橋を云ふならん。猶其餘下を見るべし。

拾穂軒北村季吟翁別莊舊地 同所目白の臺、松平大炊侯の庭中にありといふ。山の井と稱するもの、今は埋れて、名のみを存せり。俳書に、増山の井といへるあり。此翁此地に閑居ありて、著述ありし故に此名ありとぞ。此邊時鳥の名所にして、外よりも早しといへり。按ずるに、別莊の名を蹟債莊といふ。

關口てふ所に別莊を求めはべりて

住みつかぬ我宿とはぬ時鳥もとのあるじをしたひてやなく 季吟

道山幸神社



印白
不勤堂
境内眺望
勝れり
雪景尤



早秋遊豊山
長谷寺偶然
成詠
偶素秋景入山林
盡日曾無俗夏候
巖下清流堪濯熱
况傾河朔酒杯添
春臺



幸神祠

同所東の方、道を隔て右側にあり。一に道山の幸神、或は駒塚社とも號く。祭

神猿田彦大神なり。庚申の日を以て縁日とす。社司は宮城島氏なり。相傳ふ、往昔此所に豪

民あり、今も此邊を長者金の駒を塚に築籠め、榎樹を栽ゑて、かしこに幸神を勧請す。當社の神

此類入江なりし頃、其水中より出現ありし故と。古へ此邊鎌倉海道なりし故に、道山の號ありとぞ。中古大

に荒廢して、神木の榎の下に、纒の叢祠のみ存せしを、其頃の神主政泰なる者、今の如く祠

を營み建つるといふ。里談に云ふ、延寶の頃、金の駒の精あらはれ出でて、此邊の田畑をあらす、里民是をみる事敷度なり、追

り。よ時は山谷に隠る、其名を駒ヶ谷と唱ふ、又橋の上にて其駒の行方を見失ふ故に、其駒を駒留橋といふ

目白不動堂

同所東の方にありて、堰口の涯に臨む。眞言宗にして、東豊山新長谷寺と號す。

長谷小池坊の本尊不動明王の靈像は、長八弘法大師の作、總門の額、東豊山の三大字は、南岳

悦山の筆なり。緣起に云く、弘法大師唐より歸朝の後、羽州湯殿山に參籠ありし時、大日如

來、忽然と不動明王の姿に變現し、瀧の下に現はれ給ひ、大師に告げて云く、此地は諸佛

内證祕密の淨土なれば、有爲の穢火をきらへり、故に凡夫登山する事かたし、今汝に無漏の

上火をあたふべしと宣ひ、持し給ふ所の利劍をもつて、左の御臂を切り給へば、靈火盛に燃

出でて、佛身に充てり。依て大師面前に出現の像二軀を模刻し、一軀は同國荒澤に安置し、

一軀は大師自ら護持なし給ふ。其後野州足利に住せる沙門某、是を感得して奉持せしが、一

年靈感あるを以て、此地の住人松村氏某にはかり、竟に一字を鬪きて、此本尊を移し、安

置なし奉るとなり。往古松村氏靈夢を感じ、本尊不動明王を野州より此地にうつし奉りし頃、沙門某、其途中風の爲にうしな

へ此地を乞ひ、石見守その乞に任せて藩邸の地を寄附ありしとせり。今この境内是なり、袈裟掛履と稱するも、則ち此故によりて名とせり。

當寺は、元和四年、和州長谷の小池坊秀算僧正、中興ありし頃、大將軍公徳の嚴命により、

堂塔坊舎御建立あり。また和州長谷寺の本尊と、同木同作の十一面觀世音の像をうつし、新

長谷寺と改む。大將軍公大猷目白の號を賜ひ、元祿の始には、桂昌一位尼公、御歸依淺か

らず。諸堂修理を加へ給ひ、丈餘の地藏尊等を安置なさしめられたり。此地、籠には堰口の

流を帶び、水流涼々として日夜に絶えず。早稻田の村落、高田の森林を望み、風光の地なり。

境内貨食亭多く、何れも涯に臨めり。



目白坂
関口八幡宮

関口八幡宮 堰口目白坂の半腹、左側にあり。神躰は佛工春日の作なりといふ。当社を上
宮と稱す。下の宮は先に 関口水道町鎮守にして、祭禮は隔年八月十五日に修行す。当社も下の
宮に同じく、洞雲寺奉祀たり。

大塚 小石川原町の邊より、護國寺の邊迄の惣名なり。或人云く、古は大塚の地東西に分つて、其だ廣其の地
塚と稱せし、或人云ふ、今の水戸大學侯の藩邸、古の奥州街道にて、榎木の太樹あるは、其頃の

一里塚にて、則ち大塚と云ふは是なりと。本傳寺日蓮大士縁起に云く、大塚の 又南向亭云く、安藤對
島侯の東の方、森川氏の構の中に、一堆の塚あるをいふとも、紫の一本に、塚の上に不動堂

ありとあれば、今の波切不動尊の地、大塚と稱する舊跡にや。相傳ふ、太田道灌、相圖の狼
煙を揚ぐる料に築たる塚なり、故に昔は太田塚と唱へけると。或は又、鎌倉將軍守邦親王、
亂をさけて、武州比企郡大塚村に逝去す、其廟を王塚と稱す、こゝに大塚と號くるも、此類
ならんといへども詳ならず。江戸の内は大塚の 名多し、猶可考。

大法山本傳寺 大塚町横小路にあり。日蓮宗にして、駿州蓮永寺に屬す。昔は禪宗にして、



大塚
本傳寺



重光山善性寺と號く。元和年間、瑞應禪師、今の宗風に轉じ、自らの名を法仙院日行と改め、寺號をも本傳寺とす。

經讀日蓮大士 緣起に云く、往古當寺中興開山日行上人、始瑞應禪師と稱せし頃、蓮師の宗義を鑑み、覺悟の要路は法華に限る事を發明し、宗風を轉ぜんとすれども、さすがに心決しがたし。依て元和三年丁巳四月、三七日の間、不動明王の寶前において、法華三昧の行を修しけるに、同二十五日結願の夜の夢に、明王姿を現じ、師に告ていはく、汝前生は法華の行者たりしがとも、臨終の期に至り、唯空永滅の念を起したりし謗執に因て、空無の見到墮つといへども、今宿世の妙種あらはれて、本心に歸れり、速に權宗を捨てよ、實教に入るべし、我も久しく妙法の醍醐味をあまんぜん事を願ひしが、正に今一乘の法蓮を開かんとするの時至れり、社壇の良に當て、基を開くべし、其地必ず妙經讀誦の靈音ありて、不測の像を感得すべしと云々。師終に此靈夢に依て心を決し、同二十八日日遠上人に謁して受戒し、號を日行と改む。日遠上人は、駿州貞松山心性院の寺主なり。又靈示に任せ、同年六月一字を開かんとして、其地をト

せしに、同十三日の夜、土中忽然として妙經讀誦の靈音あり。登くるを待ち、其地を穿つ事數尺、果して此靈像を得たりしかば、此不動尊を、世に波切不動尊と稱せり。次の條下に出せり。一字の香堂を營みて、是を安置すと云々。此靈像何人の作なる事しるざる故に、其項日行上人一百日の間法華懺法を修したりしに、靈像師の夢に告げてのたまはく、汝宿縁空しからずして吾像に値遇す、我昔鎌倉より下總へ赴きし頃、此地不動の像前に一人の僧あり明王の告ありとすに授與せり、汝が感得する所の像は則ちこれなり、と示し給ひしより、堂前の松樹をもつて我像を影造して、彼の信

波切不動尊 同所大塚町の通、道より右にあり。別當は日蓮宗通立院と號す。

緣起に云く、此本尊は始め勢州一志郡小幡村大乘寺に安置あり。然るに建長五年の春、日蓮上人伊勢路を過ぎ給ふに、霖雨にて宮川の水まさりしかば、渡り給ふ事あたはず。時に一老翁來りて云く、師川を渡らんとならば、我水を切るの術ありとて、即ち師を誘引して、たやすく水上を渡しまるらす。此故に波切の稱ありといふ。大士是を奇とし、翁の住所を尋ね給ふに、たゞ小幡の山寺に住するとのみいらへて、失去れり。大士それより彼寺に至り、翁を尋られしに、知る人更になし。依て寺僧に其故を告げて、彼所を立出で給ふ。後寺僧此事を不審におもひしが、其寺に安置の不動尊を拜するに、佛鉢水に濡れ給ふ。依て大に驚き、直に明王を負ひ奉り、宗



波切不動堂



祖の跡をしたひ参らせけれども、其行方をしらす。其後猶東國に赴きしが、本尊の靈示あるを以て、此大塚の邊に移し参らす。農民其塚上松樹の下に、一字の草堂を營建して、是を安置し奉るとなり。

普門山大慈寺 同所上町にあり。京師五山派の禪刹にして、花洛東福寺に屬す。開山は勅諭

佛知大通國師、觀應二年辛卯五月廿五日寂す。中興は萬古昔大禪師と號す。承應二年癸巳四月十日化寂す。開基は刑部卿の局なり。

天壽院殿の侍女にして、法號を大慈寺殿仙林榮壽禪尼といへり。慶長四年、八十餘歳にて逝す。則ち當寺に墓あり。碑銘は、嚴命によりて、品川東海寺の澤庵和尚撰まるとなり。

本尊葵正觀世音菩薩 坐像にして御長壹尺三寸あり。南天竺毘首謁磨、又は唐の稽文會稽首動の作なりといふ。

鎮守日吉豐國兩社 江戸一社の神なり。社人内藤氏奉祀す。

造酒地藏尊 寺境見耕庵の本尊にして、天竺佛たり。寺記に云く、此靈像は、往古小田原北條家の頃、品川の

哲禪師住寺の頃、葵正觀世音、火防守護の爲め見耕庵を御建立ありて、こゝに移し給へり。其先小笠原彦太夫の家へ此本尊を賜はせられけるが、種々威靈の事ありとなり。其頃或夜佛告げて曰く、

正法千歳在佛在世 像法千歳遊龍宮海

末法中救此界衆生 今世後世令離苦惱

いかなる故にや、此本尊酒を好み給ふ故に、造酒の二字も、嚴命によりて稱せしめ給ひ、又造酒の二字を御額にましましめられ、當寺に御奉納ありしとなり。今も祈願あるものは、必ず酒(ミキ)を捧げ奉る。

縁起に云く、葵正觀世音菩薩は、昔時行教律師、天竺より携へ來りし靈像なり。欽明天皇已來、轉々して、右大將賴朝卿、及び足利家に傳はり、夫より後代々の將軍家、崇信厚かり

しとなり。中古日向國志布施の龍興山大慈寺にあり。其後又花洛東福寺の支院、三好山長慶

寺の本尊たりしを、東照大神君御崇敬まし、竟に江戸の大城へ遷座なし給ひ、毎月十八

日、天下泰平の御祈禱として、觀音懺法等を修せしめられ、殊更葵の一字をも附し給ひ、天

壽院殿も御信心淺からざりしにより、慶安二年、當寺を創し給ひ、刑部卿の局を開基とな

され、此本尊を當寺に移し給ふとなり。當寺日向國志布施の龍興山大慈寺を引きて創基なし給ふ所なり。山號

鳩巢室先生之墓 同所坂下町の北の裏、少し斗の岡の上にあり。傍に息男忠三郎洪謨の

墓もあり。

先生姓は室(ムロ)氏、諱は直清、字は師禮、鳩巢と號す。通稱は新助、齋を命じて靜儉といふ。其先熊谷直實の裔にして、備中國英賀(アカ)郡に出づ。考諱は玄機、草庵と號す。此は平野氏、萬治元年戊戌江戸谷中邑に産す。異質あり、睿敏人に絶す。加藩に入て官し、業を木下順庵先生の門に受け、京師に穿たり。討論の暇、大學新疏を著し、以て章句の藎を發す。正徳元年、東臺の徵に應じ、來つて江戸に就いて、往

復贈答の什、積つて巻装を成す。應對流るゝが如し。大東振古いまだあらざる所、以て大東文明の美を耀し、邦國治平の盛なるを聲して、に風海表に播し、是を無窮に宣るに足れり。有徳公統を繼ぎて後、特に先生を選んで管中侍講を授く。此職の設、蓋この先生に始る。嘗て鈞旨を奉じ、五倫五常の名義を疏記するに圖字を以し、書成つて是を獻す。又六論衍義大意を述べ、官命じて是を録め天下に布す。是より先、論孟中庸及び易經廣義を著す。考訂其及ばざる先、災に罹りて亡ぶ。先生偶未疾を感じて、重ねて稿を屬する事あたはず。侵淫日に甚しく、終に以て愈えず。疾を陳じて老を乞ふ者再三、優命す。猶職名を帯びて家居し、頤養を以て事とせり。病間談臺雜話を著す。旨あり是を徵す。因て以て獻す。又大極圖述を著し、編を成す。瀧岡千載の秘を弘開し、後學を來世に俟つ。これ乃ち先生の絶筆なり。享保十九年甲寅八月十二日、談臺の賜第に卒す。年七十八。州の豊島郡大塚里に葬る。以上鳩巢文集前編伊東貞薫休の叙に出たり。其要を摘みて記す。

筑波山護持院 音羽町の北にあり。眞言宗にして、和州長谷の一派なり。寺領千有五百石を附せらる。

本堂本尊不動明王 作不詳。往古は本尊に釋迦佛を安置せしと云ふ。

歡喜天 竝に 蟹ヶ池 庭前の池をいへり。當寺建立なきまへは、此地の名を、せりしとも、又

權現山 後園小高き岳を云ふ。

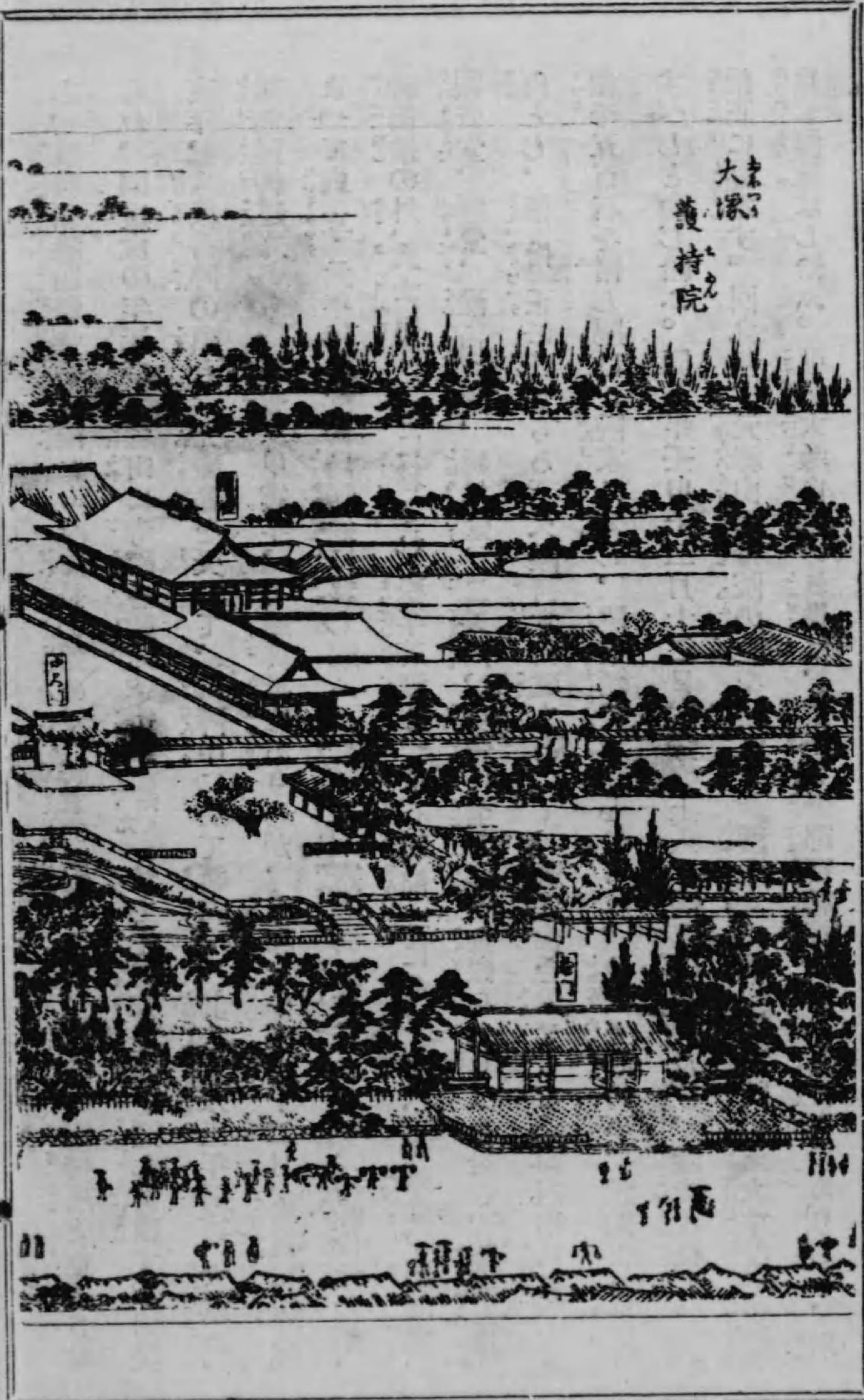
東照大神君御正眞の御尊像を安置し奉る。自から御影を植ゑさせ給ふといふ。

當寺開祖權僧正光譽は、和州初瀬寺の西藏院に住職ありしに、御歸依淺からず、江府に召れ、常州筑波山の宿寺を下し給ふ。則ち知足院 其始め、知足院有俊は、下野國筑波山中善寺を兼帶

し、眞言新義四箇寺の支配たり。慶長の始め、大神君の嚴命を蒙り、江城の護持所と定めさせられ、同庚戌の年江戸銀町に寺院を賜ふ。軒窓の事跡 依て光譽知足院を遷し營建す。同癸亥年、大坂御陣の頃も、光譽命を受けて、御陣中に於て祈禱す。其後寛永三年丙寅、大猷公、諸伽藍御建立あり。延寶二甲寅年、有廟御再修ありしが、天和五年壬戌十二月、火災に罹る。よつて貞享元年甲子、湯島切通に移し賜ふ。今の根生院 憲廟御歸依淺からず、元祿任元の年、神田橋の外、武士屋敷の地に移され、松平若狹守、仙石越前守に命ぜられ、護摩堂、祖師堂、觀音堂、經堂、灌頂堂、鐘樓堂、二天門、坊舎に至る迄、金銀をちりばめ給ひ、隆光を開山とし、權僧正に任せらる。又護持堂御建立あつて、釋迦佛を安置せらる。同四年八月、寺領千五百石を附し賜ひ、院家に列し、關東新義惣録とせられ、色衣免許の事、當院より沙汰すべしと命じ給ふ。同五年壬申十二月十二日、覺鑿上人、贈官の時に及び、隆光改任し、大僧正に昇進す。同九年、元祿山護持院の號を賜はり。護摩堂の額、護持院の三大字を、大樹自ら灑筆なし給ふ。弘法大師自作の眞像は、濃州大野郡實相院と云ふ眞言寺にありしを、取



大塚
護持院





新園







其四

護國寺境内
 西園社所寫三十三所觀音の圖







寄せられ、祖師堂に安置せしむ。観音堂の本尊は、有願御信敬の御守護佛なり。大僧正隆光の願により、寶永四年丁亥二月廿五日、退隠して駿河臺に遷り、成満院と號す。依て護國寺住持快意僧正を後住とし、御成ありて、繁昌先の如し。寶永六年己丑八月六日、隆光願により、大和國に至る。故に成満院の跡快意に賜ふ。仍て爰に隱居す。後住は知積院小池房、住職たるべき命ありて入院す。然るに享保二年丁酉正月廿二日、火災ありて、堂塔一宇も不殘焼失しければ、その頃住持退隱の願により、夫より後寺號及び食祿とも護國寺に賜ひ、大塚護國寺の内に遷し、江城護持の御祈願所となさしめられ、筑波山兼帶す。坊舎日輪院月輪院と云ふあり。

山開 毎年三月廿一日、弘法大師の御影供修行あり。此日諸人に庭中の林泉を見する。

神齡山護國寺 悉地院と號す。音羽町の北にあり。新義の眞言宗にして、和州長谷小池坊に屬す。開山を亮賢僧正と號す。公より寺領千二百石を附せられ、盛大の地なり。古庵宇(コカ)寺領三百石、大猷公守御本尊、蓮瑠石觀音像開基とあり。

トエフカ

本堂本尊如意輪觀世音 瑠璃石にして、天然のものなり。元祿半ばの頃、前川三左衛門ノ道道壽といへる人、異邦に渡り、持故あつて桂昌一位尼公崇敬し給ひし由、事跡合考に見えたり。本堂の柱を種柱と云ひて、木理種の面に等し。

薬師堂 本堂左にあり。本尊薬師佛は、昔當寺草創の時、此地層ヶ池より出現ありし靈像なりといへり。今の本尊薬師佛の胎中に收む。左右に十二神將の像を置けり。

西國三十三番順禮札所寫 本堂より西の方の山間にあり。天明年間、深林を伐り開き、各其地勢に因て佛を撰す。四時草木の花絶えずして、諸人の眼をよるこぼしむ。

歡喜天 境内壽命院に安ず。桂昌一位尼公尊信の本尊なりとぞ。永代不退轉に。天下安全の浴油の法を修せしめられ、寺産を賜ふ。

仁王門 仁王の裏に置く所の廣目增長の二天の像は、古への火災に残りしといふ。今宮五社 當所鎮守と云ふ。天照大神宮、八幡大神、春日大明神、今宮大明神、三部大權現、五社を祭る。香羽町、青柳町、櫻木町等の鎮守なりと云ふ。

涅槃像大幅 當寺寶物とす。狩野安信の筆なり。足代(アシロ)をくみ、てしやちを掛け引き上げて、軸本まで開かれずといふ。

當寺は延寶九年二月七日、上野國八幡別當大聖護國寺の住持法印亮賢に、高田御藥園の地を賜ひて寺とす。依て大聖護國寺と號す。亮賢、初め御在胎の時より、御祈禱を奉りし故なり。天和元年に、憲廟將軍の宣下蒙り給ひて、同年五月廿八日、都下新建の大聖護國寺を仁和寺に録して院家とす。依て寺領三百石を附し給ふ。貞享二年十二月廿八日に、大聖護國寺住持法印亮賢に、御許さる。其後元祿年中、桂昌院殿一位尼公の御志願によつて、御藥園の地

欠

欠

終